

語り手 片桐利喜さん
(明治30年生まれ)
昭和61年8月4日収録

あらすじ

昔、法印さんが坊領の浦島という宿屋に泊まっていた。宿の人に「明日は大山へ上ががけん、弁当作ってごしなはい」と言われて休んだので、宿では早く弁当作ってあげました。法印さんは朝早く大山へ上がろうと思って、弁当をもらって鑪戸まで上がりかけた。そこに狐が寝ていました。「おびらかいちゃんい(びっく)させや(びく)と」と法印さんは、よく寝ている狐のそばへ行ってホラ貝を吹いたら、狐はとて

狐の敵討ち

(西伯郡大山町高橋)



実在の地名や寺出る伝説

「狐を驚かしてやっただらかい」と暗目(暗ががいるではありません)もたまげてしまつて逃げ上がつて逃げ去つてしまで来うに夜さにならにゃこう思つて入つたところ、ええが、まあ、何てことろ、なんとその中に化物

わい」と、法印さんは一りの中(恐ろ)で、それでも上人でおもしろがりながら、りかけているとお堂がどんどん山道を上がりかあったのだった。けて行つたら、あたりが「ごきやんとこに堂が暗くなつてしまったのだあわい。ほんに、こころ」

「あら、昼間のはへ入つてタバコしちゃうが、坊領からこま(休憩している)わい」。法印さんは急いで屋根を上がり、どんどん上へ上へ行きますと、化物も「わが(おまえが)上がつたちゃあ、おらも上があわ」といつてついで来ます。「しかたがにゃ。こら、ま今夜はこで、おらは化物に噛まれえだわい」と法印さんは思つて、その堂の一番上の屋根裏まで上がつて、ネキにつかまつて「ホラ貝の吹き納めだけん。もう一回ホラ貝を吹いてみようかい」。

解説

この話はれっきとした実在の地名や寺の名前が出てくるので伝説になっている。そして片桐さんはみごとな雲伯方言の持ち主だった。

この話は稲田浩二『日本昔話通観』の分類によつて、「笑い話」の「愚か者」の中の「法印と狐」の「狐の敵討ち」としてその戸籍がある。

こう思つて、一生懸命をほらはらさせながら、なんと、あたりが明るくなつたのだった。最後に置かれたどんでん返しのおもしろさが、この話のポイントになっているのである。

法印さんが見回してみますと、堂など何もありません。そして、自分は松の木のでっぺんの一番

(元鳥取短期大学教授)

(水曜日掲載)